

AJEQ News Letter

Association japonaise des études québécoises
日本ケベック学会ニュースレター

2019 年 春・夏合併号

第 10 巻第 1・2 号 (通算 27 号)

2019 年 7 月 31 日発行

AJEQ第11回全国大会に向けて

小倉 和子 (立教大学)

2019年10月6日(日)に、日本ケベック学会第11回全国大会が立教大学池袋キャンパスで開催されます。立教での大会開催は2014年以来5年振りとなります。前回は日本列島に大型の台風が接近し、遠方からの参加者が無事に上京できるかハラハラさせられました。今回は天候の心配をせずに1人でも多くの皆さまにご参加いただけるよう願っています。

昨年 of AJEQ10周年記念大会では、愛知大学にジェラルド・ブシャール氏をお招きして、現代社会におけるネイションと神話の関わりについて白熱した議論が展開されました。今年はモンレアルー成田間のエア・カナダ直行便就航1周年にちなんで、「旅」をテーマに軟らかめの路線で迫ります。

プログラムはまもなく完成しますが、少々先取りしてご案内しますと、午前 to 自由論題と講演、午後 to 対談とシンポジウムという構成です。自由論題では、岩崎真紀

会員によるコプト教徒の移民共同体についての研究発表、6月末に刊行されたばかりの『ケベック詩選集』(彩流社)の編訳者たち(真田桂子会員・佐々木菜緒会員・立花英裕会員)による、ケベック詩の世界を俯瞰する共同発表、そして韓国ケベック学会から参加して下さるシン・ジュンガ氏(韓国外国語大学校)によるロベール・ルパージュ論が予定されています。



立教大学池袋キャンパス

●本号の内容●

巻頭言 (小倉 和子) …1 韓国ケベック学会に参加して (矢内 琴江) …3
2018 年 モントリオール滞 in 記 (鈴木 智子) …5 ケベック滞 in 記 (河野 美奈子) …7
カリタス学園児童らの殺傷事件をめぐって (竹中 豊) …10

その後、立教大学に招聘研究員としてお迎えしているマルタン・ドゥルアン教授(ケベック大学モンレアル校、都市・観光研究学科)がケベックの歴史遺産の観光資源としての活用に関する講演をしてくださいます。

午後のプログラムの目玉は、ダニー・ラフェリエールと立花会長との対談です。2011年の初来日以来、今回が2度目となるハイチ出身のケベック作家は、この間にアカデミー・フランセーズ会員になるという快挙を成し遂げました。ハイチ、ケベック、フランス、そして世界が熱い眼差しを向けるこの作家にとって、「旅」が創作の原点にあることは疑いようありません。独裁政権に追われてモンレアルに「移住」しなければ、彼が作家になることはなかったかもしれません。また、彼がケベックで人気作家にならなければ、アカデミー・フランセーズ入りすることもなかったでしょう。ラフェリエールはけっして旅先で取材したことをもとに作品を書く旅行記作家ではありませんが、移住を繰り返す彼のうちにつねに「漂流」の思いがあることは、モンレアルで過ごした最初の1年を想起しながら書いた小説の題名『甘い漂流』(藤原書店、拙訳)からも明らかです。『吾輩は日本作家である』(藤原書店、立花英裕訳)における芭蕉への関心も、この「漂流」の意識と無関係ではないでしょう。対談では彼のエクリチュールの根底にある「漂流」、「移動」、「旅」の観念について何うことになるでしょう。

対談につづくシンポジウム「旅、歴史、ポエジー：場所と時間をつなぐもの」もこの延長線上で企画されています。羽生敦子会員は、17世紀初頭、帆船でフランスからはるばる北米大陸に到着してケベック市を建設したサミュエル・ド・シャンプランの軌跡を辿ります。石橋正孝氏は開催校の観光学部を代表して、19世紀にナイアガラ瀑布を描いた作家の1人であるジュール・ヴェルヌの世界を紹介してくれます。そして最後にもう1人のゲスト、比較文学研究者で、詩人でもある管啓次郎氏(明治大学)が、自らの旅のエクリチュールの実践を披露してくれることでしょう。



蔦の絡まる校舎

朝の自由論題から午後のシンポジウムに至るまで、興味深いプログラムが満載で、私自身、楽しみにしています。

なお、ドゥルアン教授の講演、ラフェリエールとの対談、シンポジウムの部分は立教大学異文化コミュニケーション学部との共催イベントとして一般に公開されます。旅、移住、異文化との接触および相互理解（と衝突）というテーマは、2008年に開設された、立教大学でもっとも若い学部の関心領域ともぴたり一致します。皆さまもぜひお近くの方々にお声がけいただき、ケベックおよびケベック学会を広く知ってもらう機会になるよう、ご協力をお願いします。

閉会前には例年通り、総会と小畑ケベック研究奨励賞の授与式が予定されています。今年も2名の受賞者が夏休み中に現地で調査研究を行う予定です。その後、大学付近のレストランで懇親会があります。

1つだけご注意いただきたいのは、いつもと異なり日曜開催となる点です。立教大学は都心の大学で土曜日も教室がフル稼働しているため、終日使用できる教室がなくて申し訳ありません。お間違いのないように今からご予約おきいただければ幸いです。

それでは、当日、会場でお目にかかれるのを楽しみにしています。

(開催校を代表して)



韓国ケベック学会に参加して

矢内 琴江 (福井大学)

2018 年 11 月 18 日に開催された 20ème Colloque de l'ACEQ (於：韓国カナダ大使館) に登壇者として参加して参りました。発表は、とても緊張しましたが、新しい出会いを楽しみにして参加しました。

滞在期間は、わずか 2 泊 3 日でしたが、ACEQ の先生方との交流を通して、ACEQ と AJEQ の小畑先生、立花先生、小倉先生をはじめ先生方がこれまで築いてこられた関係の深さを実感しました。到着した日は、遅い時間の到着となったにもかかわらず、Park 先生が宿泊場所の前で待っていてくださったり、発表当日も会場までご案内してくださったり、ACEQ の先生方と昼食をとったり、終了後は懇親会、さらにその後の二次会までご一緒してくださいました。ACEQ の先生方の温かいもてなしに感動しました。

そして、今回の参加で、ケベック、韓国、日本という 3 つの地域の研究者たちが出会い、研究を深めていくことのできる「ケベック研究」の面白さを再確認しました。

この大会で、特に印象に残った発表は、招待講演者の Marie-Andrée BERGERON 先生 (カルガリー大学) の Les suites de 1968 au Québec : entre les espérances et la résignation という発表でした。主な内容は、1960 年代におけるフェミニスト雑誌から、今日のフェミニスト・ブログまでのフェミニズム言説の変遷の分析です。その中で、私がとりわ

け大事だと思ったのは、今日のインターネット・メディアを用いたフェミニズムは、これまでのフェミニズムと断絶しているのではなく、むしろ「運動の知的かつ文学的歴史にそのルーツ」を見出し得るという指摘です。そこからは、それぞれの時代のフェミニストたちが、“姉たち”の実践を学びながら、また時に厳しく批判もしながら、自らの置かれた状況における抑圧に対する最善の抵抗の手立てを探ってきた姿が見えるように思いました。

また、この指摘は、私の発表した「歴史の創造的主体としての先住民女性たちの手仕事」(L'artisanat des femmes autochtones en tant que sujet d'histoire) にも通じる視点でした。私の発表は、ケベック市を中心に活動を展開している、パートナーから暴力を受けた先住民の女性たちと子どものための支援コミュニティ、ミシナク共同ハウス (Maison communautaire de Missinak) の活動に着目し、歴史の創造的主体としての女性たちの尊厳という観点から、手仕事に関わる実践の価値を、ミシナクのコミュニティとしての形成・展開と相互関係的に捉えながら明らかにするというものでした。今日、先住民の女性たちは、先住民であり、かつ女性であるということに由来する抑圧状況を生きています。それにより、女性たちが暴力を受けたり、また、長い間、先住民の人々との大地に根ざした共同体の暮らしの中で培ってきた知も奪われたりしていました。ミシナクは、2000 年に始動したプロジェクトであ



発表の様子

り、先住民の女性たちと非先住民の女性たちや男性たちが、協働的に構築し、こうした先住民女性たちの尊厳の回復の支援を行っています。ミシナクは、その設立当初から、先住民の女性、男性、また非先住民の人々との共同で、先住民の手仕事に取り組んできました。発表では、こうしたミシナクの形成・展開プロセスと、ミシナクで行われている手仕事のワークショップを、実物や写真を通して紹介し、先住民の文化における意味などもあわせて説明しました。

私の報告に対して、会場からは BERGERON 先生からご質問をいただきました。先生自身が、フェミニストとしての活動経験があり、いま、大学で授業をされながら、教室の中で、男女平等や、多様性の尊重を実現していきたいと考えているが、どのような実践があるのかということでした。私自身も、大学でフェミニズムや人権教育の授業を担当していて、同様のことを悩みながら実践していたので、とても有り



第 20 回 ACEQ 大会参加者

難しい質問でした。この質問に対しては、私が出会ったケベックの実践記録を紹介したり、私自身の実践記録を用いた授業の展開と、学生の反応を話したりしました。

大会の後、BERGERON 先生とは同年代の研究者同士で、お互いのこれまでの実践経験や、そこでの困難などについて、大学の授業の中で、どのようにフェミニズム実践に取り組むのか、色々と話をすることができました。

そして、今回、先住民女性問題を韓国で発表する準備の中で、私自身、日本人のフェミニストの研究者が、なぜ先住民女性たちの問題に取り組むのか、それを韓国で発表するとはどういうことなのか、深く考えることになりました。私としては、日本と韓国の歴史的な問題、アイヌ問題、沖縄の問題などと向き合っていくための、実践的な知を先住民女性たちの実践に学んでいくための研究にしたいと思いました。そうしたい思いを、出会った先生方とお話しし交流することが出来たのも、有難い経験でした。

これからも、ケベックのフェミニズムを通して、実践領域、文化、地域を超えて、互

いの実践に学び合いながら、私たちの実践と思想が広がり深まっていくような出会いを生み出す実践をつくっていきたいと思いました。

<2018 年度小畑賞調査報告 1>

2018 年モンリオール滞在記

鈴木 智子

2018 年 10 月、小畑ケベック研究奨励賞をいただき、2 週間ほどモンリオールに滞在させていただきました。久しぶりのモンリオール滞在では、国際子ども図書館から依頼を受けて行ったケベック児童文学の作品 300 冊を選ぶために、専門家から助言を受けながら調査を行うことを目的としていました。計画通りに調査を進めることができるのかどうかなど不安な要素もあり、少し緊張気味にモンリオールに入りました。

今回の滞在先に選んだのは、地下鉄フロントナック駅からすぐ、オンタリオ通り東にあるキッチン付きのアパートメントホテルでした。ホテルとはいえフロントのようなものではなく、それぞれ独立したアパート

メントを各自が借りるようなシステムで、オーナーとも初日に顔を合わせたのみ。まるで暮らしているかのように滞在することができ、帰るとほっとする毎日を送っていました。

モントリオールは大都会ですが、緑が多いためか、滞在するといつも心からくつろぐことができます。今回は図書館との行き来が主でしたが、通りを歩いているだけでとても楽しく、街の建物や緑に心が和みます。お店に行っても接客が穏やかで、朝から夜遅くまで開いているお店も多く、とても助かりました。特に図書館とホテルの間にあるパン屋さんにはよく立ち寄りしました。地元の小麦を使っているというそのパン屋さんの隣にはチーズのお店があり、互いに行き来する地元のお客さんが多いように見受けられました。他に興味深かったのは、食材を購入するために訪れたオーガニックのスーパーの 1 つでは量り売りを徹底していたことで、持ち込んだ容器に食品を入れ、ごみを一切出さないシステムになっているお店もありました (写真 1)。

滞在中は、ほぼ毎日ケベック州立図書館の地下にある児童書のフロアにおいて、資料を確認する毎日でした。今回の受け入れ先となってくださったのは、ケベック大学モントリオール校の Beaudry 教授でしたが、先生は図書館の児童書担当司書 Ricard 氏も併せてご紹介くださり、滞在中はお二人に研究、調査に貴重な助言をいただきました。お二人のおかげで、研究者のみが入室でき



写真 1 量り売りのお店

る児童文学研究センター (写真 2) の中で作業を進めることができ、大変有意義な時間を過ごすことができました。Beaudry 教授は研究のことのみにならず、私の食事のことまで気を遣ってくださるなど、そのお人柄の温かさに驚きました。

図書館では児童のフロアに長くいたために、たくさんの親子や子どもたちが図書館を利用する様子を見ました。訪れた人たちは本を読むだけでなく、カウンターで借りられるレゴやゲームなどで遊んだり、DVD を鑑賞したり、図書館で借りられるビデオゲームをしたり、たくさんある漫画を読んだりなど、思い思いに過ごしている様子がとても楽しそうでした。休みの日は子どもと親が楽しむアートのプログラムもあ

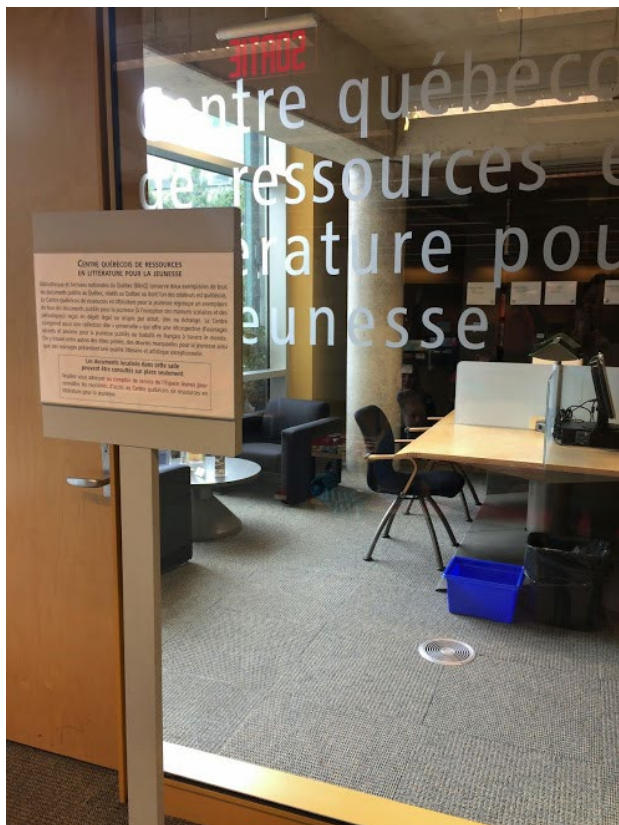


写真 2 児童文学がすべて集められている図書館内のセンター

り、本を読む場所以外としても利用されていることがよくわかります。

図書館内では様々なイベントがありましたが、急に入り口付近に黒い洋服の人たちが集まり、ダンスのようなものを始めたことがありました。別の日には図書館の上の階から紙片がまかれ、それを手に取ろうとする観客が集まる様子も大変面白く、何より突然始まるパフォーマンスを図書館にいる人々が自然に楽しむ様子が印象的でした。

滞在中 1 日だけケベックシティを訪れましたが、AJEQ の Chantal Houdet 氏に温かいおもてなしをいただきました。お忙しい業務の合間に貴重なお時間をいただいたことを、とても感謝しております。

その後ケベックシティ在住の知人宅で 1 泊し、翌日モントリオールに帰るバスの中で、前の席の方が日本語のテキストを開いていらっしゃるのに気が付きました。思わず声をかけて世間話などをするうちに、なぜモントリオールにいるのかと質問をされました。私が研究のためと言うと、彼は突然「マダム鈴木？」と私の名前をおっしゃいました。彼は驚くことに、昨日の Houdet 氏との食事会に同席予定でいらしたケベック州政府事務所アジア担当の Philippe Quesnel 氏でいらっしゃったのです。予期せぬ嬉しい出会いでした。

今回のモントリオール滞在中、様々な方との出会いによって有意義な時間となったことに感謝の気持ちでいっぱいです。そして小畑奨励賞をいただき、小畑先生の大好きでいらしたモントリオールで研究の機会をいただいたことを、今後の励みとしたいと思います。



<2018 年度小畑賞調査報告 2>

ケベック滞在記

河野 美奈子（立教大学）

2018 年 9 月 2 日に、4 月から東京ーモントリオール間で就航したエアカナダの直行便に乗り、初めてモントリオールに降り立ちました。巨大なビル群が立ち並んだ街並みを見て、ここが北米大陸であることをあらためて実感しました。



Imaginaire Nord の研究室

今回の研究調査の目的である、ケベックの先住民文学の研究を行うためにケベック大学モントリオール校 (UQAM) のダニエル・シャルティエ先生にお世話になりました。シャルティエ先生はカナダにおける先住民文学の研究者ですが、ケベックの社会、とくに間文化主義に関する研究もされていて幅広い分野で活躍されています。またシャルティエ先生は、モントリオール校附属の Imaginaire Nord (北方表象比較学術国際研究所) の責任者でもあります。この研究所は 1 万 3000 点に及ぶ先住民関連の資料を揃えており、ケベックの先住民文学研究の拠点となっています。今回の滞在ではこの研究所の方々に大変お世話になりました。

ケベックの先住民文学研究は日本ではまだあまり知られていない分野ですが、近年多くの作家が作品を発表し国際的には大いに注目されています。以前はそれぞれ部族の言葉が仏訳あるいは英訳され出版されていましたが、現在はフランス語で書く作家も登場しています。私はそのなかでも、イヌ一族出身の詩人ジョゼフィーヌ・バコン

(Joséphine Bacon, 1974-) と作家ナオミ・フォンテーヌ (Naomi Fontaine, 1987-)、そして詩人ナターシャ・カナッペ・フォンテーヌ (1991-) を中心に研究を進めました。

ジョゼフィーヌ・バコンは 1947 年に生まれ、4 歳の時に寄宿学校に入れられました。そこでは同化政策のもと、彼らの文化や言葉を否定し、フランス式教育を受けさせられました。ジョゼフィーヌはそれに抵抗しますが、その時の心の葛藤を処女作の詩『メッセージ棒』 (*Bâton à message*, 2009) に書いています。ナオミ・フォンテーヌやナターシャ・カナッペ・フォンテーヌはバコンとは年代が離れており、彼女たちのフランス語や自らのルーツに対する思いが微妙にずれているところが興味深い点です。

彼女たちに関する資料は Imaginaire Nord で、そして先住民に関する一般的な資料は BAnQ (ケベック州立図書館) で集めました。

また滞在中にシャルティエ先生の「アメリカ・インディアンとイヌイット文学」に関する授業に出席することができました。ケベックにおける先住民についてより深く知ることができ、この研究を始めたばかりの私にとっては大変有意義な授業でした。そのうえ、2 回目の授業ではゲストスピーカーとしてジョゼフィーヌ・バコンが登壇するという幸運にも恵まれました。当日は多くの学生が出席し、立ち見の学生も現れました。あらためて先住民文学に対する関心の高さを実感させられる瞬間でした。彼らは高校生の頃から先住民文学を読んでお



モンリオールの街角のウォールアート

り、ケベックの間文化主義がしっかりと根付いていると思いました。授業ではジョゼフィーヌ・バコンが自身の詩の朗読のあと、学生からの質問に答えるのですが、様々な質問に楽しそうに答える彼女がとても印象的でした。

授業の後にシャルティエ先生の計らいジョゼフィーヌ・バコンと昼食を共にすることができました。俳句に興味があるとのこと、日本のアイヌを題材にした漫画のことなどを話すことができ楽しい時を過ごすことができました。

研究以外ではケベック・シティを訪れたり、フランスのリヨンからケベックに移り住んだ友人と会ったりすることができました。ケベックでは移住者のためにケベック

のフランス語を学ぶ講座があるなど、移住者のためのサポート体制が整っているといった話を聞き、あらためてケベックの移住者を受け入れる寛容な姿勢を感じました。

モンリオールの街では地下道に悩まされました。縦横に延びる地下道は冬の寒い時期にはとても便利ですが、何度も迷い、結局諦め地上に出ることを繰り返しました。次回訪問の際には地下道攻略も目標の一つとなりました。

研究を始めたばかりで今回の研究調査でどれだけのことができるのか初めは不安でしたが、終わってみると予想以上の収穫がありました。その一つとして帰国後シャルティエ先生の論文『北方の想像界とは何か：倫理上の原則』を小倉和子先生(立教大学)と共訳できたことです。従来、単純化されていた北方に関する表象を、先住民の声を反映させることで複雑化し、そこから再度この表象を捉え直そうという大変意欲的な論文の翻訳に関われたことは、今後ケベック先住民文学研究を続ける上で貴重な経験になりました。また今年の 4 月にシャルティエ先生の講演を聞きに北海道大学を訪れましたが、先住民の問題は自分たちの問題であることを再度痛感しました。このような実りの多い滞在の機会をいただけたことにあらためて感謝いたします。

最後にケベックの良さとして、ケベック人の人柄があがりますが、私も様々なところで実感しました。とくに BAnQ では探していた本が見つからなかったとき、図書館

司書が 30 分後に、私がまだ図書館にいるのかわからないにも関わらず、見つけ出してくれました。それに感動したことを今でも鮮明に覚えています。

<寄稿>

カリタス学園児童らの殺傷事件をめぐる

竹中 豊

「朝 7 時 40 分頃、川崎市・登戸駅近くで小学生らが刃物で襲われる」……。2019 年 5 月 28 日 (火曜) の朝、ちょうどテレビをつけていたらそんな速報のテロップが流れた。まさか切りつけられたのはカリタスの児童ではないだろうな、と、その時は何となく聞き流していた。ただ、正直、気になり嫌な予感がしないでもなかった。そしてとんでもないことが起こった。それが的中してしまったのだ。「なんてこった!」。それはもう、身震いするほどの衝撃だった。

午後のニュースで詳細がだんだんとわかってきた。とっさにわいた疑問は、「なぜカリタスの子どもたちが?」だった。容疑者は狂気にかられた岩崎隆一(51 歳)という男で、事件現場で自殺。最悪なのは、スクールバスを待っていた小学校 6 年生の栗原華子さん(11 歳)と保護者で外務省職員の小山智史氏(39 歳)の 2 名が、亡くなられたことだった。さらには、児童と保護者 18 名が重軽傷を負うという、学校事件史上まれにみる大惨事になってしまった。

カナダでの報道ぶりも大きかった。とくにケベックの *Le Devoir* 紙(5 月 28 日付け)

は、襲撃された直後の児童たちが青いシート上で、応急手当をうけている生々しい写真を見せていた。普段はかわいらしい制服姿が、そこでは何とも痛々しい光景と写っていた。あまりにリアルなためか、この写真は日本では報道されていない。



カリタス学園のルーツはカナダ・ケベックだ。その母体はケベック・カリタス修道女会(Soeurs de la Charité de Québec)にある。この修道女会は、1849 年にケベック市にてシスター・マルセル・マレによって設立された。篤い信仰のなかにあった彼女は、つねに周囲にたいして「愛のあふれ」を伝えることのできた人だった。心の目をしっかりと開きながら、いつも貧しい小さい人々とともにあった。

その約 1 世紀後の 1953 年、同会のシスター 3 名が初来日し、やがて本格的な教育活動へと邁進していく。すなわち、1960 年、川崎市に学校法人カリタス学園が誕生し、翌 1961 年にまずカリタス女子中学高校が開設される。以降の詳細は省くが、こうしてカリタス学園は、マレの精神を受け継ぎながらカトリックの価値観を基盤とし、普遍的「愛」(Charité)をもって人に尽くす人間を育てることを目指してきた。

そんな「愛」の精神を継承・実践してきたカリタス学園が、今回、なぜこうした惨劇を被ってしまったのか。悲劇はなぜ起きたのか。容疑者は自殺してしまったゆえ、詳しいことはわからない。ただ、容疑者の内



華子さんが描いたマリア様



わたしの兄弟であるこの最も小さい者の一人にしたのは、
私にしてくれたことなのである。

(マタイによる福音書 25・40)

左・マリア像 (栗原華子・作)

的苦悩と絶望的挫折感が犯行の要因であつたろうことは容易に想像できる。「狂気」は苦しみからの逃避なのか。それにしても、神はなぜこんな残酷な行為を見逃してしまったのか、犠牲になったのは無垢のこどもたちや若い親ではなかったか、神の愛はどこへ行ったのか、神はなぜ沈黙しているのか、キリスト者として犯人を真に「赦せる」のだろうか……。カリタス関係者のみならず、誰もがこんなやるせない気持ちを持ったに違いない。



ところで事件当日の夕方、学園本部での記者会見がテレビで生中継され、私は食い入るように見守っていた。会見にのぞんだ



百合子さんが描いたお父さん



右・父親像 (小山百合子・作)

のは、齋藤哲郎理事長 (この 3 月まで中・高の校長だった)、小学校の内藤貞子校長ならびに倭文覚教頭で、皆馴染みのある顔ぶればかりだった。この惨劇を語る苦渋の光景をみながら、柄にもなく私は思わず涙ぐむほどだった。しかしこうした苦悩と混乱の極限状況にありながらも、取り乱すことなく、冷静に、そして立派に対応していた姿には、“身内”ながらも感心するばかりだった。

一方、カリタス学園は子どもたちの安全・安心のために、普段から万全の体制をほどこしていたのは、私も承知していた。たとえば、専用スクールバスの運用・維持管理費・人件費などに、年間 6700 万円も費やし

ていたのだ。事件直後の保護者会でも、学校側を非難する声はまったく聞こえてこず、むしろ「学校はよくやってくれている」との反応ばかりだった。これは、不幸中の幸いだった。とはいえ、それでも事件は起きてしまった。学校の安全を完璧には防ぎきれない、という現実の厳しさを突き付けられた感さえする。その意味で、今回の事件が学校関係者に与えたショックは、はかりしれないだろう。



その約 1 ヶ月後の 6 月 29 日、カリタス学園講堂において栗原華子さんと小山智史氏の追悼ミサが執り行われた。ミサには私を含め 1,000 人を超える学園関係者が参列した。在校生による聖歌隊の美しい歌声とともに、ミサは横浜司教区の梅村昌弘司教の主司式のもと、厳かに行われた。立派なミサだった。「主よ、みもとに召された人びとに永遠の安らぎを与え、あなたの光の中で憩わせてください」、と。

追悼ミサ会場の出口では、小さなカードが全員に配られた。栗原華子さんの描いた可憐な聖母マリア像、そして小山氏の娘である百合子さんが描いたユーモラスな父親像のイラストだ。しかし今となっては、それは涙を誘う記憶として、嘆きのマリア像と思い出の父親像のようにみえて仕方なかった (イラストをご参照)。

追悼ミサ直後の挨拶で、カリタス学園理事長・齋藤哲郎氏は、悲劇のなかにありながらも「赦し」の必要性をこう語るのだっ

た (要旨)。「天国のお二人は、犯人を憎み続けることを望んでいないでしょう。憎しみは憎しみしか生まないからです。今回の事件を犯した人物を生む病んだ社会を、カリタス<愛>の力で少しでもよくすること、それをお二人は望んでいるのではないのでしょうか」。

爽やかな「希望」と「勇気」を与えてくれる言葉だった。

(元カリタス女子短期大学・AJEQ 名誉会員)

●編集後記●

編集の都合で合併号となり、しばらく間があいてしまいましたが、今号も充実した内容となりました。執筆者のみなさんに改めてお礼申し上げます。近代以降の日本の学校教育にケベックの修道会が大きくかかわってきたことは知られていますが、その代表的な存在であるカリタス学園の悲劇に衝撃を受けた会員は多かったのではないのでしょうか。ほかにも衝撃的な事件が続き、後日談はなかなかメディアに取り上げられませんが、長年にわたり、同学園で教鞭をとられた竹中名誉会員からタイムリーなご寄稿をいただくことができました。恒例の ACEQ 参加報告、小畑賞調査報告からは、今年もまたケベック研究のさらなる発展の可能性を感じました。旅好きの編集子は今度の大会が楽しみです。立教の美しいキャンパスでお会いしましょう！ (T)

AJEQ ニュースレター

年 3 回発行

発行人：立花英裕 編集人：大石太郎